



巫女巫女ハーレム  
四姉妹がお仕えます！

上原りょう

illustration ©志水なおたか

美少女文庫  
FRANCE & SHOIN

ブローグ❀待ち人來たる!?

「ああ、寒い寒い」

梓沙は白い吐息を桜色の口もとからこぼし、手をこすり合わせながら長い下り道を歩いていく。人がなんとか歩ける程度に整備された山道を進む少女の足は、足袋に草履という古式の揃え。そして彼女の歩みに合わせ、狐の尻尾のように高く結びあげられた淡い髪が軽やかに弾んでいた。

朝靄をまとった山中の空気は、世界中の汚濁をすべて洗い流したかと思えるほど澄明で、ひんやりとして冷たい。

「ああもう、水なんてどこだって同じじゃないかな。わざわざ滝から汲んでこなくていいじゃないっ」

梓沙は姉の神楽に言われ、この先にある滝の水を汲むためにやってきたのだ。

料理が苦手な少女にとって水道水だろうが、澄んだ滝の水だろうが、水は水に変わりはない。あえて、滝まで水を汲みにいくことがいまいち、ピンとこない。

「今日のおみくじが大吉じゃなかったら、こんなことしなかったのに。今日はちよつとタイミングが悪かったかも」

しかし、すぐににんまりと笑みを口もとに浮かべる。そして水を汲む桶おけをくるくると振りまわす。

梓沙は白衣の衿もとから紙片を取りだす。

それはおみくじ。それも大吉だ。

少女は毎朝、日課のようにおみくじを引いて、一日の運勢を占っている（もちろん、お金はちゃんと入れている。一回百円）。

そんなふうにしておみくじを引くことを日課にしている梓沙ではあったが、なかなか大吉が出ず、今日の大吉は数カ月ぶりのこと。

そして彼女が真っ先に見たのは、待ち人の項目。

ずばりそこには、待ち人來たる。

（矢嶋やしまさま、梓沙は矢嶋やしまさまのことを慕たまごえっています……）

矢嶋やしまさまとは、梓沙の生家でもある玉響たまごえ神社の祭神で、かつて日本の地に満ちた混沌やしまあまかろのみことを打ち払った、神話世界の英雄、矢嶋やしま天降命の愛称だ。少女は昔から寝物語に矢嶋

天降命の武勇伝を聞き、十代の少女がアイドルに熱中するのと同じように、夢にまで見るほどの憧憬の念を抱いているのだ。

待ち人來たる。それは大吉の定型であることは巫女である梓沙には十二分にわかっている。しかしそれでもなお、うれしさのあまりに妹たちに思いつきり自慢してしまつた。妹たちは残念ながら反応薄だったが、そんな些末なことは気にしない。

梓沙は高揚した気分のまま、少し飛び跳ねるぐらいの調子で道を進みはじめる。

しばらく道なりをおりていけば、風に揺れる葉のこすれる音に混じり、地響きのようなものが聞こえてきた。

玉響神社内でも特に神聖視され、祀られている御滝だ。

木立や裸の枝の切れ間から、鋭い懸崖が、そして怒濤のように降り注ぐ水の壁が見えてくる。それはまるで白糸をいくつも束ねたかのよう。

そして、滝壺では激しい水飛沫が粉雪のように四散している。時折冷たい北風が吹き抜けければ、滝の水が横へなぶられ、水飛沫が雪の結晶のように閃きながらさあつと流されている。

冬のこの季節、流れ落ちる瀑布は部分的に凍り、それが薄い雲からのぞく陽光を浴びて神々しくきらめいている。

梓沙はここに来るといつも胸を熱くした。その神々しさにあてられたように、心が

浮き立ってくるのだ。この場に満ちた神聖な空気。大切な思い出。

「はあ……」

梓沙の口からは知らず、甘いため息がこぼれる。

少女はしばらく底まで覗けるぐらい綺麗な滝壺を眺めていたが、いつまでもそうしているわけにもいかない。

少女はよし、と自分に活を入れて桶かじで水を汲みあげる。思い出の場所と言っても、今の季節の水温は決して好きとは言えない。

「う、ううつ、つう……!」

水温は神経をぶつ切りにされて、細胞単位まで解体されるような冷たさ。一気に鳥肌立ち、水が七割ほど入った手桶を持つ手がひきつるように震える。

「ああ、矢嶋さま見ていらつしやいますか、矢嶋さまあ。私はこうして今日も一生懸命、巫女として働いています……だから、もう一度くらい私の前に現われてください」  
水汲みが朝食のためということなど、心の奥底にうっちゃって、少女は痛みさえ覚える水温に少し涙ぐみながら瀑布ばくふを見あげる。

(え?)

その時。断崖の天辺になにかが突っ立っているのが視界に入った。

(な、なに、あれ)

逆光でわかりにくいだが、それはどうやら人らしかった。梓沙はいぶかしげに目を細めた。

(どうしてこんなところに人が?)

玉響神社は知名度が低いうえに、市街地を一望できる山の頂近くにあることから交通の便がよくない。そんなところへ神社の本殿を訪れるならいざ知らず、どんな道程を経たかはわからないけれど、滝の上から滝壺を臨む、あんな場所に出るなんてたゞことではない。

崖の上には鎮守ちんじゆの森があつて、そこにたどり着くには巫女しか知らない道を行くしかないのだ。言い知れぬ不安を感じた梓沙は声をかけようとする。

しかし彼女が声をかけるよりも早く、その影は風に揺れる水面に映った風景のように大きく揺れはじめた。そうかと思えば、人影らしきものが大きく傾かたむき、その影が刹那の瞬間には宙空に浮かびあがり、一直線に滝壺へ真つ逆さまに――。

「あ！」

梓沙が叫ぶと同時に、少女の目の前で大きな水柱が立った。

「う、うそ、うそ！」

少女は頭をこちゃこちゃにさせながら目を剝く。

「ちよっとなんなの、自殺だなんて。神社の娘のそばでよくもやってくれるわね！」

梓沙はポニーテールを悍馬かんばのように振り乱し、滝壺のなか、数秒前に水柱が立った場所を覗きこむ。しかし今の落下の衝撃のせいか、水泡と水底が攪拌かくはんされ、目を凝こらしても水中は判然としない。

「ああもう、こうなったら……」

少女は白衣の袖をまくり、袴の裾を引きあげた。白い絹のようにすべやかで、引き締まった美脚があらわになる。

「寒さがなによ、人命には代えられない」

少女は心の隅にあつた迷いを断ち切ると、いざ飛びこもうとする。だがちょうどその時。水面に一つ、二つと水泡が浮かびあがった。

大きな泡が水面をゆらゆらと流れ、ぱちんと壊れる。やがて水底から黒々としたものが浮上しはじめる。

「大丈夫ですか!!」

少女は叫び、飛びこんだ。

梓沙の眼前に、うつ伏せの状態で男性が浮かびあがってきていた。